編 集 後 記

編集委員長 宇田川 晴 司

新年、おめでとうございます。

望月英隆先生より本誌編集委員会の委員長を引き継いではや1年が経過しました。当初、それなりに取り組むべき課題も想定していましたが、いざ始まってみると解決すべき新たな課題が続出し、それらへの対応に追われました。更には新型コロナウイルスの拡大という大問題が出現し、大変な1年とはなりました。コロナ問題はまだまだ解決には程遠く、この文章の載る時点で世の中はどうなっているのか、見通せない不安な毎日が続いています。第一線で日夜COVID-19への対応に取り組んでおられる多くの会員諸兄の献身的なご努力に心より敬意を払い、感謝を致すとともに、この問題に一刻も早い解決の得られんことを切に希求致しております。

昨年1年間を通して取り組んできた主要な課題として、多重投稿や模倣といった問題に対する対応のルールの明確化、これと関連して査読作業へのJ-STAGE Similarity Checkの導入があります。これは全世界的に投稿論文のオリジナリティが、今までにも増して重視され、重投稿、重発表、模倣、剽窃などに関する規制の厳格化の傾向が日を追って進んでいることへの対応です。編集委員会としては単に投稿者の皆様への規制を強化することが目的ではなく、本誌論文が対外的に高い評価を得ることで本誌に論文が掲載されることの意義がより高くなることを目指しての作業です。一方で、ルールの明確化により、本誌投稿論文の英語論文化を望まれる方の手助けとなることも期待しており、今年はこのパイプを太くすることも、行ってまいりたいと思っています。

望月前委員長の発案で5年前の第77巻より、「綜説」の掲載が始まり、ほぼ年間4編のペースで、外科の各分野の最新動向に関するレビューを掲載して参りました。会員の皆様にとって非常に有意義なコンテンツとなっていると考え、今後とも現在のペースで継続をして参る予定です。また本号からは、「特別寄稿」という新たな種類の依頼論文の掲載もスタートいたします。綜説が「会員の外科臨床実践に資する内容で、編集委員会が掲載意義を認めたもの。」であるのに対し、「特別寄稿」は「1. 一般学術論文以外で特に編集委員会が掲載意義を認めたもの。2. 主に総会特別企画等のテーマより、編集委員会が選定し、司会者に内容の総括の執筆を依頼する。」と規定され、本学会及び本学会会員諸兄と社会とのかかわりに重点を置いたテーマ設定を想定したものです。早速昨年10月に開催された第82回の本学会総会の特別企画等のテーマの中から、喫緊の課題である若手外科医の減少に関連するセッションと、やはり今年は外すことのできないであろう「新興感染症の経験・対策 - With/After コロナ」を取り上げることに致しました。本号において、その第1弾として、総会特別企画1「外科医減少に対する具体的な戦略」でもご発表といただきました支部委員会アンケートに関するご報告を、支部委員会委員の上尾裕昭先生にご寄稿いただきました。

このように、編集委員一同、投稿者の皆様のご努力がより良い形で結実し、本誌の学術的意義が一層高まることを常に目指すとともに、いささか手探りではありますが、これまでも増して広い方面で会員の皆様のお役に立てるように努めてまいります。

最後になりますが、昨年1年間、新型コロナウイルス感染拡大の混乱の中でも担当者の努力により編集会議のリモート参加環境が整い、査読・編集作業が滞りなく継続され、雑誌の発行も遅延なく行えましたこと、各編集委員、事務局職員並びに関係の皆様のご努力に、編集委員長としてこの場を借りて感謝申し上げます。

本年も、日本臨床外科学会雑誌をさらに発展充実させてゆくべく、本学会会員の皆様には一層のご協力ご支援をいただけますよう、よろしくお願い申し上げます。